

バングラデシュからの手紙 2007 年

ブラザー・フランクからのメッセージ

友人のみなさんへ

ブラザー・フランクより

マイメンシン(バングラデシュ)にて

2005年5月 ペンテコステ(聖霊降臨)の季節に

《愛することを選択し、希望を選択する》

「主よ、わたしはあなたの庭に咲く花。わたしを摘んでください。」

これは、バングラデシュで歌われる讃美歌の一節で、この歌詞が今年の「信頼の巡礼」のテーマでした。この巡礼は、若者と障がい者たちが村々の多くの家族と共に過ごし、そこにはイスラム教徒、ヒンズー教徒、キリスト教徒が集まる祝祭のときです。この歌詞はこう続きます。「そして、あなたが造られたすべてのものを飾るために、わたしを用いてください。」

これらの「信頼の巡礼」は、本当に祝祭のときなのです。2006年10月に、約6000人の若者がインドのコルカタ(カルカッタ)に集まりました。インド各地、バングラデシュ、パキスタン、日本、さらにアジアの他の国々やヨーロッパの国々からも若者が集まりました。この大会の準備は大変でした。しかし、このような多様な人たちが集まることは本当に祭りのときであり、新しい希望と力の源になりました。この大会のテーマは、「愛することを選択すること、希望を選択すること」でした。わたしたちみんなが、大きな課題を前に葛藤しています。みんなが道を探し求めています。そしてこの「信頼の巡礼」は、そんなわたしたちに一つの道を指し示します。「愛することを選択し、希望を選択する」、そういう道です。

《10周年を迎えた CCH》

もう長い間、わたしたちはマイメンシンやバングラデシュ各地で、無数の障がい者に出会ってきました。この2月、CCH(障がい者のためのコミュニティセンター)は創立10周年を祝いました。障がい者、中でも貧しい障がい者を歓迎し、彼らと連帯する場所として、10年前にこの小さなセンターは始まったのでした。10年前、貧しい障がい者たちは、その数は多いのにもかかわらず、忘れられた存在で、彼らには「役に立たない者」という烙印が押されていました。しか

し、この10年で多くのことが変わりました。今や、多くの場所で彼らの存在が認められるようになりました。

自分の重荷を分かち合うために彼らはCCHにやってきます。そこには彼らを歓迎し、その物語に耳を傾ける人々がいて、必要な助言もします。理学療法を受けるために来る人もいます。若い障がい者たちは、わらや刺繍を用いたカードを制作し、そこから生活費を得ています。カーペットを制作する女性たちもいます。その他、お金の貸与や援助を受けて、ヤギや牛を購入したり、小さなお店を開く障がい者もいます。障がいをもった子どもたちも学校に行くようになりました。

(CCHは時々このような子どもを経済的にも応援します。) 知的な障がいをもつ子どもたちのためには、デイケアセンターが3ヶ所で始まりました。その一つが「アシャニール(希望の家)」です。この家は多くの人にとって、喜びとインスピレーションが与えられる場所となっています。ほんの数日前、このアシャニールが国際ラルシュ・コミュニティの暫定メンバーとして承認されたという嬉しい知らせが届き、みんなでお祝いをしたのでした。CCHの10周年を記念して、新しいカーペット工房も作られました。13人の若い女性たちが、今そこで仕事をしています。これらの活動をずっと支えてくださっている方々、特にオランダと日本のみなさんに心から感謝したいと思います。

この10周年にあたり、わたしたちは感謝の気持ちで、周りの多くの人たちとの連帯や友情の絆をあらためて祝っています。そこにはイスラム教徒、ヒンズー教徒、キリスト教徒がいます。極貧の仲間もいます。あらゆる年齢の人々がいます。これらの体験を通して、そして今までの日々の歩みを通して、わたしたちはこう宣言したいのです。「弱い者・貧しい者に共に仕えることこそ平和への道である」と。この道は神さまの道です。そして、どんなに現実が厳しくても、わたしたちは希望の灯火を燃やし続けながら敢えてこう宣言するのです。「平和な未来、それは可能である」と。

《障がい者と共に歩く信頼の巡礼》

例年通り、今年も3月と4月は、「障がい者と共に歩く信頼の巡礼」の期間でした。今年の巡礼は、バン

グラデシュ南部に位置するチッタゴンから始まりました。イスラム教徒、ヒンズー教徒、キリスト教徒が数百人、そこに集まりました。その後さらに4つの地域---ダッカ、ラシャヒ、マイメンシン、ディナシプル---で巡礼が開催されました。ここ2週間の内に最後の2ヶ所---クルナとボリシャル---で巡礼が開かれます。これらの巡礼で、わたしたちは実によく歌います。そして互いの物語に聴き合います。ゲームも楽しめます。そのようにして、神さまが一人一人に美しくすばらしい贈り物を授けられたことを祝います。心を開き互いに歓迎し合うとき、一人一人の中に咲いている花の善さをわたしたちは歌い出すのです。「役に立つ」には弱すぎる身体の中にこそ、善良さと愛の賜物があることに気づいて驚くのです。神さまの庭は何と多様なことでしょう。成長することを希求している種もあれば、光をひたすら求める命があるのです。そして、多くの命が、このような「共にいること」の暖かさの中で花を咲かせるのです。このような巡礼によって、神さまが造られたものを、今このときに、さらに美しくしてゆく道が示されます。

《ショプノニール》

障がい者と共に生きるわたしたちの歩みは、成長し続けています。アシャニールの他に、ショプノニール（夢の家）も始まりました。数年前、ある人が、大都市で出会ったホームレスの貧しい子どもたちのために、いくつかの家をダッカに開きました。この子どもたちの中には、身体的あるいは知的に障がいのある子どもたちが含まれていて、そのほとんどは家族から見放された子どもたちでした。2006年、この人がバングラデシュを去ることになり、その後いろんな団体がこの子どもたちを迎え入れたのですが、どうしても20人ほどの障がい児の行き先が見つかりませんでした。そこでCCHは---現実的にはとても大きな問題が伴うことに敢えて目をつぶりながら---この子どもたちを迎え入れたのでした。

現在、この子どもたちはマイメンシンのショプノニールと名づけられた家に住んでいます。愛と優しさに溢れたくさんの人たちが今この家を手伝っています。しかし、専門の訓練を受けた人には不足しています。ボランティアとCCHスタッフは、この子どもたちとの日々の生活から多くのことを学びます。大きな苦悩を体験したこの子どもたちは、非常にゆっくりと開花して、このケアと愛の環境の中で、喜びを周りに輝き出すようになります。

ティナはここで大きな助けとなっています。彼女は、

知的な障がいをもつ子どもたちとその親たち（ほとんどは母親だけ）のためにすばらしい働きをする若いイスラム女性です。昨年、ボランティアのグループと共に、ティナは障がい児のための小さなデイケアプログラムを、マイメンシンのビハール人地区で週に一回始めました。しかし、集まっていた部屋はあまりに小さくなり、現在、ボラシプルの大きな小学校（400人の児童）の敷地に新しい竹の家を建て、週に3回、障がい児と彼女は過ごしています。

《障がい者と生きる青年たち》

多くの青年たちの存在によって、マイメンシン内外でのこれらの障がい者との活動が可能になっています。CCHには、雇用された人たちから成る小さなチームがあるだけです。しかし、これらの青年たちは、大学での勉強を続けるためにささやかな援助（毎月約750円）を受けながら、毎週3~4回、午前または午後の時間を障がい者との活動に差し出します。弱い者・貧しい者に仕えるこの経験は、彼らの日々を豊かにし、しばしば、自分の将来の展望を変えてゆくのです。

数ヶ月前、わたしたちはこれらの青年たちと「アノンドクラブ（喜びのクラブ）」を始めました。それはテゼの家の近くに住む10代の青年たちで筋ジストロフィーにかかっている人たちとの交流をめざしたものです。彼らの家はみんな非常に貧しく、病はゆっくり進行し、身体はしだいに衰えてゆくのです。彼らはふだん車椅子（CCHが提供）に腰掛けるか、家の床に横になっているだけです。彼らの名前はファルーク、マムン、ショヘル、ラジブ、シュブロ。家族が、窮屈で暑い部屋から外に連れ出してくれることもほとんどありません。

毎週、土曜日の午後、ボランティアの青年たちは彼らの家に行き、車椅子をリキシャに縛り付け、彼らをCCHへ連れてきます。彼らはとても弱く、CCHに移動することは相当な冒険です。CCHに着くと、わたしたちは一緒に2・3時間を過ごします。わたしたちは歌います。しかし、彼らにとってそれも簡単ではありません。力がほとんどないからです。ゲームもします。しかし、彼らの手を持ち上げなければなりません。それからわたしたちは川辺に行き、軽食をとりまします。あるときは、ブラマプトラ川を横断するために、車椅子ごと小船に乗せました。そのときの彼らの喜びようは終わりを知りませんでした。わたしたちは、約20人の仲間です。そして、このような祝祭は、いつも小さな復活祭のようなのです。

《政治的状況と貧しい人々》

バングラデシュは、現在劇的な変化のときを迎えています。2006年の年末に、前政権は任期を終え、大統領は暫定政府を設けました。この暫定政府の重要な役割は、新しい民主政権に向けての選挙を準備することで、選挙は2007年1月に行われる予定でした。しかし、すべては非常に違った方向に進みました。

前政権は、腐敗と無法状態、そして権力の不正な濫用に満ちていました。爆弾とその他の様々な暴力によって多くの人が殺されました。そして、これらの脅迫を背後で操作していたイスラムグループは、政府の保護を受けていたのです。

暫定政権は、その行使権を「非常事態」を宣言してフルに活用し、軍の助けを得ながら、多くの人を逮捕し、違法な資産を押収して、国に規律を回復させようとしてきました。前大臣たちや前首相の息子さえもが現在刑務所に送られています。高級車と別荘は押収され、預金口座も捜査されました。前大臣たちの介入によって野放しになっていた多くの犯罪人も、今回収監されました。人々は喜びました。

しかし、暫定政権による過ちもありました。状況を「合法化する」ための熱意で、厳密な意味で違法な多くの家屋、店舗や市場さえもが破壊されたのでした。多くのスラムで、極貧の人々は国の所有地に竹やプラスチックの小屋を作りそこに住んでいたのですが、残念なことにこれらも撤去されてしまいました。彼らは、他に行く所がないのです。何十万もの家が破壊されました。この地域でも、知人の家や、わたしたちの援助によって建てられた家がたくさん壊されました。しかし、まもなく政府はその間違いを認めて、貧しい人の家の破壊は止まりました。

多くの家が壊された地域の中の二つの地区に、わたしたちが始めた小さな学校がありました。ブルドーザーが到着した日の夜、この小学校の先生たちと友人たちは竹とブリキ屋根から成る校舎を分解して、このテゼの家の隣の空き地に運びました。先生たちは、次の日、家族と子どもたちを捜しに行きました。多くは、他のスラムに移動し何とか住む場所を確保していました。子どもたちの大部分も、ボラシュプルの大きな小学校で合流することができました。立ち退きを強いられた校舎のうちの1つは、そこの敷地内に再建されました。しかし多くの家族は、今でも住む場所を探しています。何人かは以前の居住地域に戻り始めています。いったい他にゆくところがあるのでしょうか。現在、この状況がどこに向おうとしているのか、静観している状態です。しばらくしたら、子どもたち

に声をかけ、再び小さな学校を始めたいと思います。ここでの生活は、貧しい者との連帯とはどういうものかということ、何回もわたしたちに教えてくれるのです。

《壁を乗り越えるために》

今年、若者との「信頼の巡礼」のテーマは、「障がい者との巡礼」のテーマと同じものになりました。コルカタ大会はわたしたちみんなに新しい熱意を与えました。新しい信頼の道です。バングラデシュのキリスト教徒は、極めて少数なうえ（1億5000万人のバングラデシュ人口の0.5%以下）、多くの教派に分かれています。キリスト教徒が祈るために共に集まり、民族性や教派の豊かな多様性を分かち合うという「信頼の巡礼」が今こそ必要なのです。

人々を分断させる多くの壁があります。ある壁は古くから存在し、ある壁は最近生じたものです。カースト制度、宗教、社会的立場が生み出す壁。「主よ、わたしは、あなたの庭に咲く花です。わたしを摘んでください。そして、あなたが造られたすべてものを飾るために、わたしを用いてください。」

「主よ、わたしを用いてください。今日、このバングラデシュで。」青年たちはこの歌詞の意味を理解しています。何が美しくされねばならないかについて分かっています、そして、彼らの心には、この冒険に参加することへの夢が息づいています。新しい未来、新しい社会、和解する教会への模索に加わりたいと願っています。彼らは心の中にこの信仰を持っています。「復活なさった主に近づく生活とは、他者に近づいてゆく生活である」と。

「信頼の巡礼」の祝祭で、わたしたちは内側の確信を分かち合い、進むべき道を確認します。その道とは、共に隣人に仕えてゆこう、空腹な人に差し出そう、ホームレスを歓迎しよう、弱い者を訪ね、希望のない人を励まそうという道。

ブラザー・ギョームは、さらに別の仕方での巡礼を歩もうとしています。定期的に、彼は孤立した村々の貧しい人々を訪問します。多くはキリスト教徒です。孤立した村々への道路は非常に悪く、ほんの数キロの距離もリキシャでは数時間かかります。彼は家々を訪問し、その一軒で祈りの集いを開きます。このような訪問は、村の人々にとって祝いのときとなります。しばしば、その村には、病人、みんなから忘れられている人、緊急の世話を必要とする人などがいます。わたしたちのマイメンシンの家は、そのよう

な人たちを援助するためにも開かれています。

この2月に、国の西部に位置する場所----マイメンシンからバスで7時間----で、若者のための集会が開かれました。この地域の人々は貧しく、学校に行く子どもたちはほんのわずかです。事実、学校もほとんど存在していません。わたしたちは数年前からこの地域の約60人の青年たちが大学で学べるように援助しています。彼らの多くはキリスト教徒ですが、ヒンズー教徒もいますし、数名のイスラム教徒もいます。

この地域の15の村々から150人の青年たちが集まりました。夜は寒く、多くが服を着たまま藁（わら）の上で眠りました。食事は、地面に掘られた穴を利用して料理され、落ち葉と藁とが燃料でした。今まで数回ここで集いを開催してきました。そのようにして、ゆっくりと、人々の考え方が変化してゆくのです。

《ビモール》

最近、もう一つのお祝いがCCHでありました。それは、ビモール・マランディに関してのお祝いです。約6年前、ディナシプルで障がい者との巡礼が開催されたときに、ビモールに出会いました。当時彼は12, 3歳でした。彼は事故で両腕を失っていました。その後、彼はマイメンシンに来て、当時CCHが始めた障がい児のための絵画教室に出ようになり、足と口で絵を描くことを学んだのです。彼の特別な才能に気づいたわたしたちは、特別に先生の下で学ぶようにと励ましました。

彼にとっても、わたしたちにとっても、それは難しい道でした。彼は落胆して村に戻ってしまい、数週間わたしたちは彼を連れ戻しました。約2年間、そのようなことが続きました。欲求不満で村へ帰る彼と、連れ戻すわたしたち。2006年になって、ようやく彼は耐えることを身に付け、ここに留まるようになりました。

この3月、ダッカで子どもたち（障がいをもつ子どもと持たない子ども）のための全国絵画コンテストが開催され、ビモールはそこに出品しました。全国から応募があった中で、ビモールは一等賞（金賞）を獲得したのです。

わたしの弟アルバートは、ウェブサイトを作りました。このサイトで、ビモールが足で描いたカードを見ることができます。カードはCCHから購入が可能です。またこのサイトでは、CCHの他の障がい者たちが制作したカードも見ることができます。

<http://www.taizeinbangladesh.nl>

《女性クラブ》

この10年間で大きな変化は、CCHに連なる多く若い女性の障がい者の生活にも見られます。数年前CCHの「女性クラブ」のために小さな家が始まり「シャンティニール」と名づけられました。シャンティニールは、命の溢れた場所です。約20人の女性が毎日ここに来ます。そこには、編み物のためにオランダや日本からとどけられた毛糸が積みまわっています。最初、彼女たちはマフラーを編むことを学びました。このマフラーはわたしたちが1枚60円で買い取り、それは冬の季節に屋外で暮らす貧しい人たちに配られました。今までの人生で一度も収入が無く、「使いものにならない」と言われ続けていた彼女たちがマフラー1枚で60円の収入を得たのです。貧しい両親にその収入を渡す彼女たちの何と誇らしげなことでしょう。そして今彼女たちは刺繍を学びだしています。何人かは、刺繍作品をカードにしたり、大きなテーブルクロスも作るようになりました。またこの国の若い女性用の服に刺繍をする人たちもいます。オーストラリア人のマリオン・ピール夫人は、この女性グループの熱心な協力者です。忍耐の内に、彼女は、このクラブの女性たち一人一人に何が出来るかを見出そうとしています。確かに、編み物でさえ難しい女性たちもいます。しかしみんな忍耐しながら道を模索しています。このクラブには、喜びと幸せが満ちています。ここでみんなが集まりともに過ごすということ、それが、この女性たちが今まで知ることの無かった励ましの源なのです。これは、彼女たちにとって、実に大きなことなのです。

《感謝》

親愛なる友人のみなさん、何年にもわたって、マイメンシンのこれらの人々と多くのことを分かち合ってください、本当にありがとうございます。みなさんのお祈りと連帯に心から感謝しています。わたしたちが花を咲かせるなら、それが小さな花であろうと大きい花であろうと、イスラム教徒、ヒンズー教徒、キリスト教徒であろうと、もし、わたしたちがこの大きな主の庭で摘まれることを良しとし、主の造られたものを飾るために今ここで自分を差し出すならば、そこに喜びがあります。本当の幸せと命の充満です。

ブラザー・フランク